

7月20日(月)

外国語活動Ⅰ 8時30分～10時

今回の授業のキーワードは ***Diversity***

※外国語はコミュニケーションのツールです。そして外国人とのコミュニケーションは、まさに「異文化間」でのコミュニケーションになります。私は母語においても「異文化間」コミュニケーションと考えていますが、その話は別の機会にとっておきたいと思います。

※いづれにしても外国語を指導する教師にはコミュニケーションの場で必要となる文化的知識が必要です。その知識を持っているのと、持っていないのでは、授業の“深まり”が違います。

※もちろん、外国人との交流会などを、皆さん自身が学校全体の行事として企画するかもしれませんが、皆さんが中心となって行うことは、まだまだ先のことかもしれませんが、外国人との交流の際に注意すべき点もあります。

※特に「交流会」ということではなくても、今後は日常的な交流が増えるかもしれませんし、外国人の児童がみなさんの教室にいるかもしれません。当然、ALTの先生とは一緒に仕事をしていくことになります。

※異なる文化や言語を持つ人々との交流は避けられないものとなります。第14章と第15章は、まさに、そのような時に役立つ知識です。しっかりと読み込み、プロの教師としての知識を身に付けて欲しいと思います。

※授業の最初の10分はSmall Talkです。トピックはMy Dream(私の「夢」)です。お互いにお互いの「夢」を伝え合ってください。

※Zoomは8時15分にOpenします。それまでにメールが届かない人がいましたら「迷惑フォルダ」を確認し、それでも届いていない場合はクラスメートに連絡してURLを教えてもらってください。

## 第 14 章 異文化間コミュニケーション

### 1. 英語教育における「英語」のとらえ方

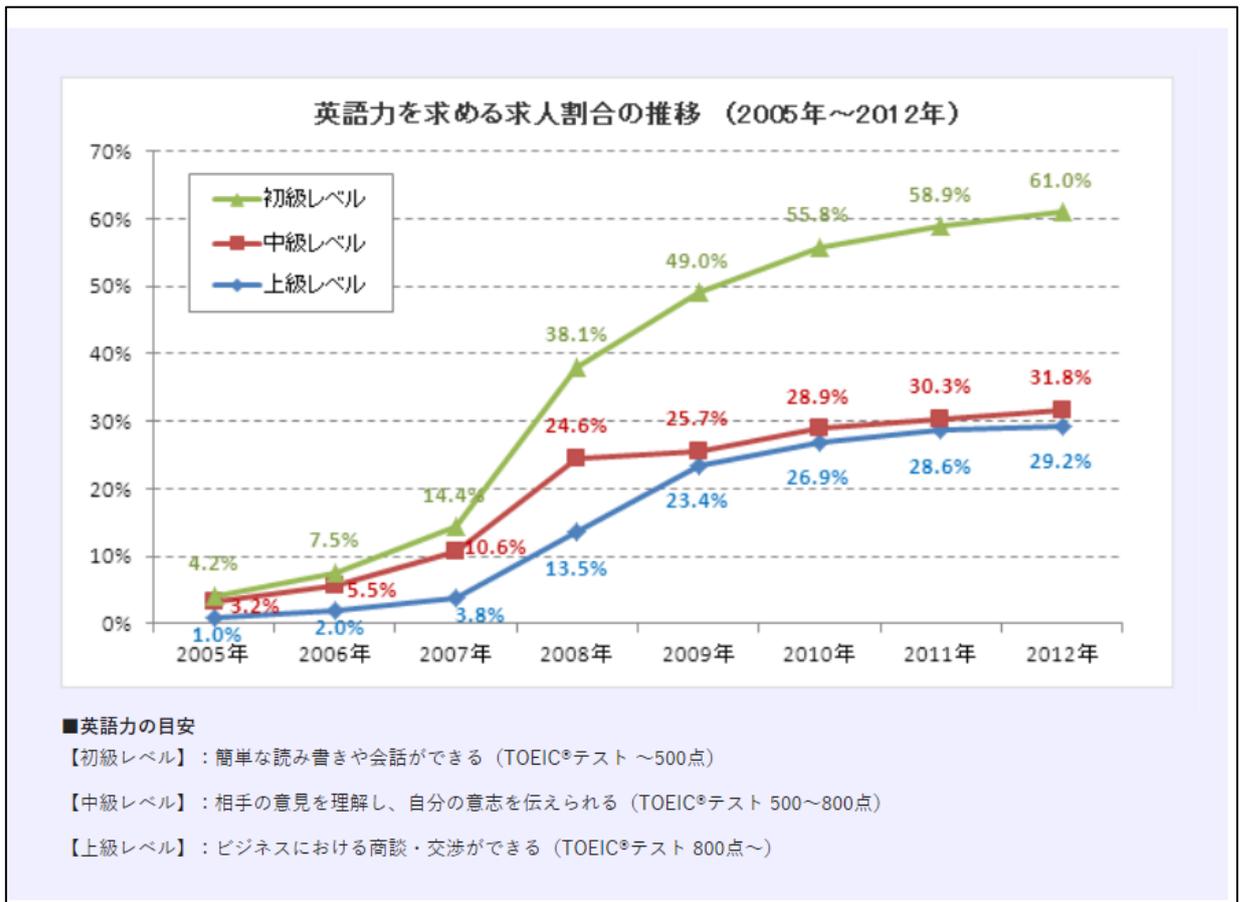
#### 1.1 国際社会での役割

- 世界で母語話者の最も多いのは中国語
- 英語は世界中と最も広く使われている言語
- 指導者自身がどのような英語を話し、どのような英語を教えるべきか十分に理解していない。

#### 1.2 World Englishes の概念

- 様々な国で話されている多様な英語
- 国際補助語として利用できることが目的であれば、母語話者レベルのコミュニケーション能力が到達目標として適当でないことは明らかである。
- 必要以上に高い目標を掲げるのは非効率的でもある。

☞アメリカ英語でなければダメ？ イギリス英語でなければダメ？みなさんが学校で学んできた英語は、さて、どこの国の英語？ 話し合ってみてください。



<https://doda.jp/guide/ranking/056.html>

※TOEIC ～500点＝～英検準2級 500～800＝2級～準1級, 800点～＝1級

☞みなさんの中に英語を使ってアルバイトをしている人はいませんか？どの程度の英語力が求められていますか？話し合ってみてください。

## 2 異文化コミュニケーションとは何か

### 2.1 コミュニケーションとは何か

○How old are you?

### 2.2 異文化間コミュニケーションで気を付けるべきこと

○全ての外国人に対して「英語」で話しかけることについては注意する必要がある。

○「外人」という言葉は差別語

## 3 ステレオタイプとは何か

### 3.1 ステレオタイプの定義

○単純化された固定観念

### 3.2 日本人のステレオタイプ

## 4 異文化適応

### 4.1 カルチャーショックとは何か

☞カルチャーショックを体験した人はいませんか。話し合ってください。

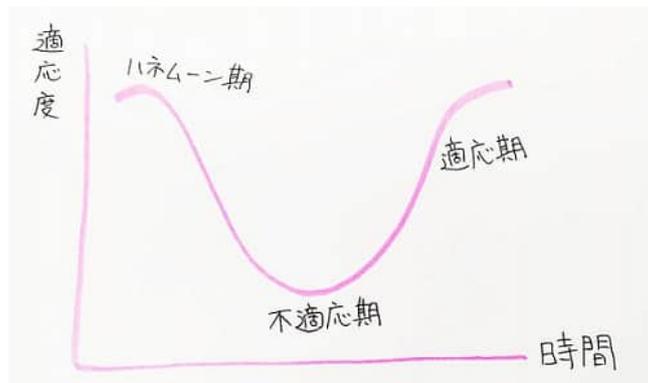
## 【異文化適応過程】 Uカーブ仮説とWカーブ仮説

異文化適応過程を表すモデルとして、Uカーブ仮説とWカーブ仮説があります。

### Uカーブ仮説

**Uカーブ仮説**はリスガード（S.Lysgaard）によって提唱されました。新しい環境下で起こる人間の心理状態の変化を表した曲線で、カルチャーショックを乗り越えて異文化に適応していく過程を、ハネムーン期、不応期、適応期に分類しました。その様子を図示するとU字に見えることからUカーブと呼ばれています。また、U字型曲線モデル、U字曲線などとも呼ばれます。

海外だけでなく、新入社員の五月病などもUカーブ曲線で説明することができます。



## 1. ハネムーン期

---

ハネムーン期は見る物全てが新鮮に感じられる楽しい時期です。短期旅行ではハネムーン期しか経験しません。

## 2. 不適應期

---

不適應期はいわゆる心理的ショックを受ける時期で、カルチャーショック期とも呼ばれます。**カルチャーショックとは異文化の習慣や考え方・常識が自文化と大きくかけ離れているため、心理的ショックを受けたりすることです。**ハネムーン期とは反対に、現地での慣れによって嫌な部分が見えたり、幻滅したりする時期です。この時期の長さは年齢や性別、性格、経験、異文化と自文化の差などによって変わります。

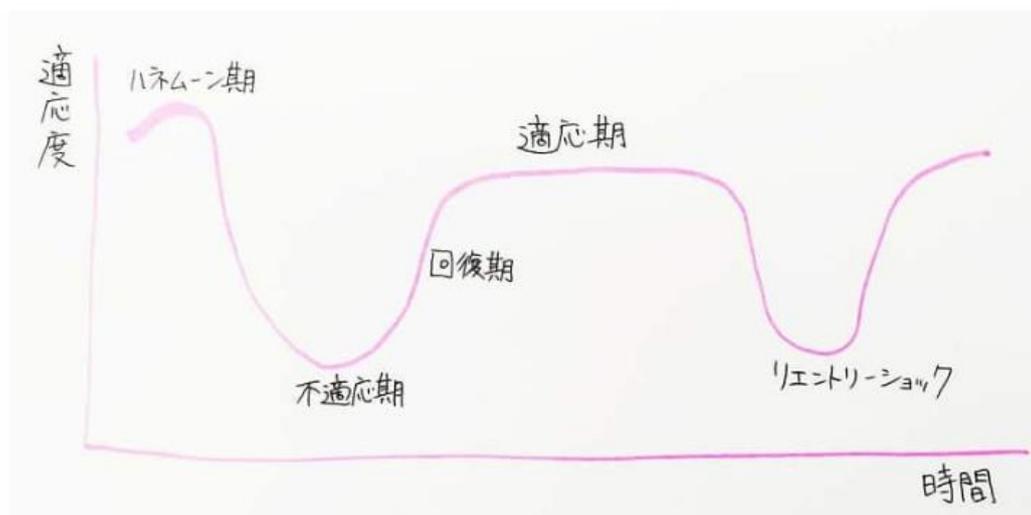
## 3. 適應期

---

カルチャーショックが収束して徐々に順応してきている時期です。回復期とも呼ばれます。

## Wカーブ仮説

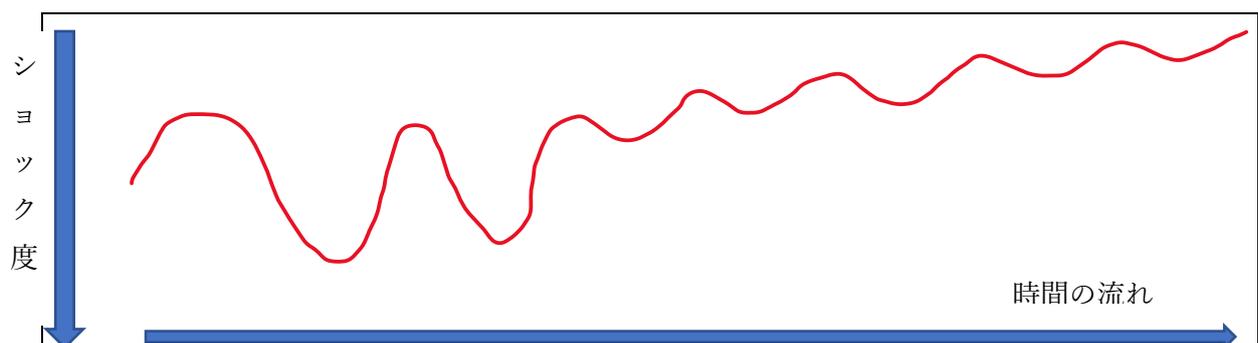
Uカーブ仮説を基として、その後ガラホーン（J.Gullahorn）によって提唱されたのがWカーブ仮説です。Uカーブ仮説に帰国後の自文化での再適応過程を加え、その適応過程がW字に見えることからこのような名前がつけられました。W字型曲線モデルとも呼ばれます。このWカーブ仮説を何段階に分けるかは諸説あるようですが、少なくともハネムーン期、不適応期、適応期、リエントリー・ショック期の4段階あります。



### 4. リエントリー・ショック期

適応期を経て帰国した人に訪れる、自国文化への再適応が必要な時期です。海外在住歴（適応期）がそれなりに長く、現地での生活に満足していたり、友人に恵まれていた人ほど帰国後の再適応に苦しむとされています。この時に受けるショックを、リエントリー・ショックと呼びます。

私自身は過去の論文で「Wカーブ+ローラーコースターピリオド」が存在するのではないかと主張したことがあります。私の主張を図で表すと以下の通りです。



4.2 外国人の日本への適応

4.3 日本社会における差別

5 英語話者と日本語話者のコミュニケーションについて

5.1 文化における価値観の違い

5.2 発話行為の比較

5.3 談話スタイルの比較

5.4 異文化間コミュニケーションで目指すコミュニケーションスタイル

(1) 高/低コンテキスト

☞担任の英語は児童によく通じます。なぜでしょうか？話し合ってみてください。

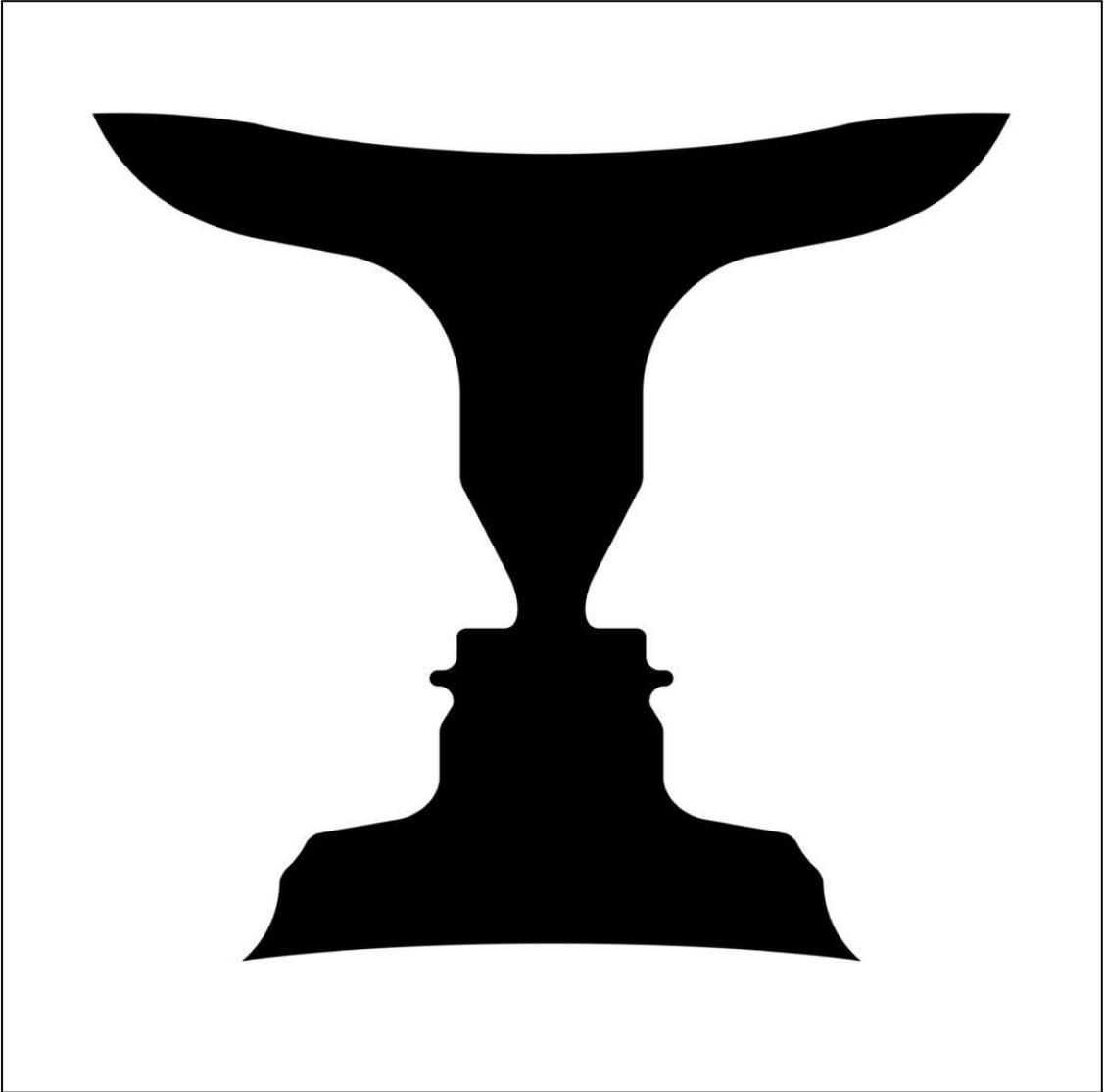
(2) 日本人としてのアイデンティティの育成

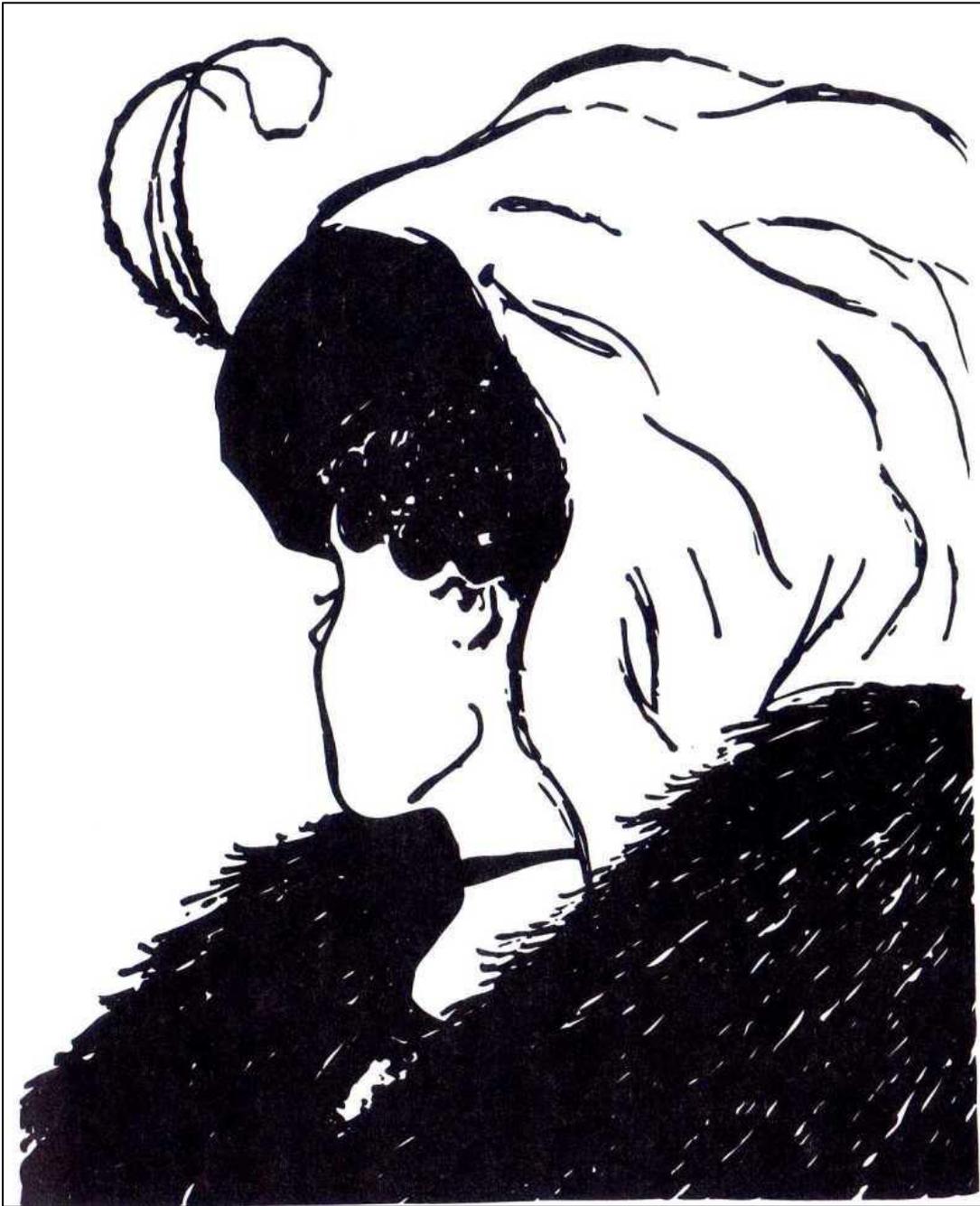
## 第 15 章 小学校における異文化間交流

1. 異文化リテラシーを育む異文化間交流・異文化理解の必要性

○異文化リテラシー＝自己や他者の考え方や社会の成り立ち方も視野に入れて、異文化を読み解く力

○人はそれぞれの立場や立ち位置、置かれた環境などによって、同じ 1 つの物事でも見え方が異なる。





2. 異“文化”とは何か

3. 異文化“理解”を促す「共通性」の発見と「共感」の重要性

4. 異文化リテラシーの基礎を養うクロス・カリキュラム

## 5. 異文化間交流は非日常ではなく日常である

○multicultural(多文化)よりも Diversity(多様性)という言葉のほうが重視されはじめている。

## 6. 小学校における異文化間交流実践例

☞**教員になったら、ぜひ、交流実践をしてください。体験することはとても大切です。**

### 【課題レポートから】

①ステレオタイプとは、ある特定の社会敵集団のメンバーに対する単純化された固定観念であると定義されている。これは、肯定的なイメージや否定的なイメージを固定化して持ったまま個人と接するため、個人の特性を無視することにつながる恐れがある。そのためステレオタイプとは相手への正確な理解を妨げる原因となる。そのように考えた具体的な例として、異文化交流会がある。私が高校生の時にクバサキハイスクールとの1日交流会をしたことがあり、その時に私たち学校側からは、交流しに来てくれた学生に対してどのような質問をするか、レクをして楽しませようなどと考え、準備していたが、実際に会ってみると相手の雰囲気圧倒されてしまい、英語を使ってうまく会話することができなかった。このように、ステレオタイプに囚われた状態で交流学习を行なってしまったために相手を理解することができず、会話にも影響が出てしまったのではないかと考える。(A)

②自分に置き換えてみても、講義でスモールトークをする際、みんなにきちんと伝わるように、外国語が苦手と思われないように、という意識が生まれて、なかなかスムーズに話せなくなる時がある。誰かがそういう雰囲気を出してしまうと全体にも影響して、豊かなコミュニケーションは行われなくなる。しかし、円滑なコミュニケーションをとる際、大切なのは完璧な言語能力ではない。自分の使える単語やジェスチャーを使って伝えたいという気持ちをもって、自分の持っているもので勝負することが大切なのではないだろうか。そして教師を目指す私たちは、子どもたちにこのことをしっかり伝える必要がある。教材としてピコ太郎さんや、出川イングリッシュなどを取り入れ、彼らのすごさやコミュニケーションをとる目的、大切さなどに気付かせる授業をつくることで、異文化コミュニケーションへの意欲が生まれ、「異文化」に対する考える力が付いたりすることにもつながるだろう。そして、そうした活動の延長線上には、差別や偏見に対する児童自身の考えと言うものがあるのではないだろうか。差別や偏見のない相手の言語や文化を理解する社会の存在こそが、円滑な異文化コミュニケーションをとるために欠かせないものであると考える。(U)

③もう一つの要因は、差別である。異文化間コミュニケーションで重要なのは、異文化を理解し、受け入れることである。しかし、「外国人だから」ということを理由に、住居に住め

ないということや就職に支障が出てしまうという事実が日本には存在する。また、日本国内でも部落差別が存在していた。もしかしたら、現在でも存在しているのかもしれない。そのように考えると、差別は身の回りで起こっているのかもしれないと私は考える。相手を理解しようとしないうちに自分を理解してもらうことはできない。例えば、Aさんは読書が好きで、Bさんにオススメの本を紹介した。すると、Bさんが「自分は読書が嫌い。なんでこんな読むの?」と言われてしまった。すると、今度BさんがAさんに何かオススメした際に、Aさんは素直に受け入れるという気持ちにはなれなかった。このことは、人に限らず国に置き換えても言えることだと私は考える。どちらか片方が壁を作ってしまうと、もう片方も壁を作ってしまう、異文化の交流も途絶えてしまう。差別はこのようなことを生み出しかねない行為である。したがって、異文化間コミュニケーションを妨げる要因のもう一つは、差別であると私は考える。(S)

④例えば、中国人は公の場でもいつも大きい声でしゃべっているから自己中心的で気が強い人というイメージを持っている人は多いのではないか。他にも、黒人は乱暴で怖い人が多いなどというイメージや東南アジアの人はとても貧しい、などの小さいことから大きいことまで多くの偏見があるだろう。そして、それは個人で持っているものから日本人ほとんどが持っている偏見までであると思う。しかし、それは同じ国でも1人1人性格が全く違い、外国人だからといって決めつけてはいけない。よく言われる、“人を見ただけで判断しない”というものと同じだと思う。人をその人の国籍や見た目で判断してはいけない。そういう勝手な思い込みを持っていることが、コミュニケーションをとることに抵抗を感じてしまったり相手を嫌な気分させたりして、異文化間のコミュニケーションを妨げることになってしまうと考えられる。(S)